

がんの痛みはすごいものだとしても、たくさんの人は思い込んでいます。けれどもそろそろがんの痛みに関して考えを切り替えて下さい。

西暦2000年ころを大きな区切りとして、がんの痛みはそれまでの難攻不落のものから、今や、もつとも抑え込める症状に180度転回しました。

痛みで苦しむという時代は基本的には終わりました。しかし、それは緩和ケア病棟などの専門施設で、しっかりと計画的な疼痛治療をする場合です。

泣き叫ぶようなつらい痛みでも、数日では痛みを抑えられる。そう言う時代になりました。

ただし今の緩和ケアが万能というわけではなく、どうしても痛みがとりきれない人が10%ほどいます。

ですからがん疼痛の治療というのは、未だ重要な問題であり続けるということです。

西暦2000年からは90%の人が痛みがとれて、10%の人に辛い思いをさせてしまっています。2000年以前までは10%の人が痛みがとれて、90%の人が泣き叫んでいたのです。大きく変わってきています。

ここにいらっしゃる方は緩和ケア病棟をご利用にならないよう、私は祈っていますが、仮に利用されるようなことがあっても、痛みで苦しむことはないと考えていただいでください。

次に痛みと双壁をなすのは息が出来ない、息が吸えない、肺がんとか肺以外にできたがんの肺転移、転移性肺腫瘍などの重要な症状です。現在、呼吸困難感

の緩和は残念ながら痛みほどの進歩は見せていません。しかし、確実に進歩をと

げ、さまざまな緩和法が開発され、実施されています。消化器症状でい



暴風雪で断続的に強風が吹き付け、湿った雪が降り続けるなか、ご来場戴いた皆さんに感謝の心を込め、挨拶する谷川代表。

ますと一番重要なのは、なかなかとれない吐き気です。

がんがお腹の中、全体に広がる、一日中吐き気で苦しむということがありますけれど、そういったものに対して、大きな進歩がありまして、2000年以前には考えられなかった症状緩和が見られるようになっておきます。

全身倦怠感の緩和

身のおきどころがない全身倦怠感の治療というのは、痛みにとつて代わって大きな問題だと思えます。

がんの終末期にはほぼ全員が経験することです。痛みや呼吸困難に匹敵するほどつらい症状です。

最近本人に率直に「かなり進んだがなんですよ」と、特にオプートには包むわけでもなく説明しますので、自分がかんである、しかも



そうとう進んでいると認識をしますが、一昔前であれば自分が末期のがんであることを多くの方はしらせられないで、身のおきどころがないひどい状況だけど、ごんだから仕方がない。自分は腰が痛いんだけど看護師さん

に「いっちゃんかんのではないかと思っちゃうんですよ。それは違うんですね。我々の考えではがん終末期に現れる全身倦怠感、普通の日常生活の「今日はちよつと肩がいたいとか、腰が痛い」という倦怠感とは違

健康に日常生活を送っている人が経験している全身倦怠感と、進行がんの全身

倦怠感、適切な日本語がないから同じ言葉で身の置き所がないだるさなどといいますが、我々の考えでは独立した病気なんです。

腰のコリなんてあたりまえじゃないかと思ってしまう。「どうですか、腰がつかいんじゃないですか」と聞くと必ず「そうです」といわれます。

軽く考えずに素直に訴えてください。我々もできるだけ聞き出すようにこちらから問いかけます。

肩も痛い、頭も痛くなる、目の奥も痛くなる、そうした症状に対する非薬物療法の研究が各地で進んでいます。

それから精神症状としては、薬物の副作用による症状と脳転移による症状とがあります。脳転移には神経症状が伴います。(3面につづく)